WAVE MIE UNIV.

32 2005 7 July

[特集]

変革の道に立つ、三重大学の挑戦

CONTENTS

[View of This issue]
地域圏大学としての伝統が
次の時代への道筋を拓く
● 理事・副学長　森野捷輔
01

[特集　教授座談会]
変革の道に立つ、三重大学の挑戦
～「21世紀COEプログラム」採択への戦略～
● 理事・副学長｜森野捷輔
● 大学院医学系研究科教授｜鈴木宏治
● 工学部教授｜中村修平
● 生物資源学部教授｜大原興太郎
｜司会｜理事・副学長｜亀岡孝治
02-05

[RESEARCH FRONT 1]
尾鷲の魅力を伝える古文書を
町おこしの出発点に
● 人文学部教授｜塚本　明
06-07

[RESEARCH FRONT 2]
基礎研究と特許基盤の開発が
アマモ場造成に貢献
● 生物資源学部教授｜前川行幸
08-09

[RESEARCH FRONT 3]
世界から注目される
マラリア防圧の独自研究
● 大学院医学系研究科教授｜鎮西康雄
10-11

[RESEARCH FRONT 4]
青色発光ダイオードを生んだ
半導体研究の未来へ
● 工学部教授｜平松和政
12-13

[CLOSE-UP **Interview**]
3次元注文システムを通じて
心豊かな装いを楽しんで
●教育学部教授｜増田智恵
14-15

[TOPICS]
「ライト＝マンフォード往復書簡集
1926-1959」
2005年1月～5月
三重大学の主な出来事
16

View of This issue.

地域圏大学としての伝統が次の時代への道筋を拓く

理事・副学長（研究担当）
森野捷輔

新制大学の発足、大学紛争の洗礼、そして法人化。今、私たち大学人は、ほぼ四半世紀おきにやってくる大きな変革の中にいます。私たちが取り組んでいる現在の変革の価値と意義は、再び25年先に問い直されるに違いありません。

そのとき、2030年。化石燃料の浪費は、企業社会の身を削る熾烈な競争は、グローバリズムに対するリージョナリズムの位置は、そしてまた、人間の環境開発と生態系を繋ぎあう新たな哲学は？大学の研究を取り巻く社会や生活は、どのように変貌しているのでしょうか。

私たち現代人は、社会の変革や新しい哲学を予感し、望んでさえいます。しかし、高層ビルの谷間をエアカーが駆け巡るような、20世紀的未来像を夢想する人々はもはや少数派でしょうが、その一方で私たちの外面的生活や発想の仕方は、依然として20世紀後半の型を脱していない。こうした矛盾を脱却して、自然、資源、歴史、社会、環境すべてにわたって、本当の進歩と平和と人間性が描かれるとするならば、それは異なる発想や手法に基づくことになると思われます。

この変革には、技術革新であると同時に自然系の保全が、産業再生であると同時に人間性の復興が、いわば学問のすべてのスペクトラムが挙げて含まれるはずです。変革によって強化されるべき根底的人間性や自然観は、基礎的研究あってこそ認識され育てられ、一方で応用的実践的研究があってこそ、それが具体的な姿（ダブロー）として結実できると考えます。

大都市大学に期待される研究のあり方が、先鋭な縦割りの専門性だとするならば、地域圏大学に期待されているもう一方の極は、連合的全体性にほかなりません。地域の課題を探究するならば、それが狭い研究分野の枠に納まり切るなどということは決してなく、技術の研究が産業へ経済へ社会へと通じ、環境の研究が自然へ歴史へ文化へと連なっていく、このことこそが、私たちの本当の未来の姿を描き出す研究の動機であり契機だと信じます。この意味で三重大学は、地域との強い接着力を持った、各種学問の横断的統合体でありたいと思います。

地域医療、地域防災、環境との共生、安全・安心、産業復興、伝統と文化の再発見、行政との協力、共同技術研究。三重大学には、地域との協力を重んじ、それを糧に研究の発展を拓いてきた強力な伝統があります。アジア・パシフィックとの連携の視点から見れば、これらのキーワードが十分な国際性を持ちうることは明らかです。地域の課題になおいっそう積極的に応じ、その刺激を通じて学問の連合を図り、日本中あるいは世界中に散らばる地域圏大学との対話と協調を深めていくことを通じて、大都市に一極化し支配と細分と画一を重ねてきたこれまでの社会とは違う、未来社会を渡り切ることができるはずです。三重大学だからこそ実現できる、このような研究の25年先までの道筋を、今つけておきたいと、私は考えています。

もりのしょうすけ
工学博士
専門分野は、建築構造学
1942年生まれ